

## 第 24 回 「愛と死と孝と (二)」

\*\*\*

「孝」について。

講義 加地伸行

「論語指導士」養成講座 第 24 回講義

論語教育普及機構 代表 加地伸行

今回は「愛と死と孝と」第二回です。これは、この講座の最後の講義です。

それでは早速、文章を読んでいきましょう。

もう ぶはく こう と しいわ ふぼ ただそ やまい これうれ  
「孟武伯 孝を問う。子曰く、父母には唯其の疾を之憂えよ」(為政第二)

孟部伯という人物が、親孝行とは何ですか、と訊ねました。

『論語』の中には、「孝を問う」「政を問う」という質問形式が多くあります。実際に質疑応答をしていたのでしょうか。この場合も「孝」とは何ですかと問いました。もちろん彼は通常の「孝」の意味を知っていますが、あえて、さらに深く「孝」の教えを受けたいということです。

孔子はこう答えました。

「父母には唯其の疾を之憂えよ」

父母に対しては、「其の疾」、この場合の「其の」は父母の病を指しています。父母の病を心配する気持ちを持って、と言いました。

実はこの文には、まったく別の解釈があります。

「其の疾」、この「其の」は自分ととる。そして、あえて「之憂しむ」と読みます。父母に心配させるのは、自分が病気の時だけにしろ、という解釈です。

「其の」は、父母の病か、自分の病か。このふたつの解釈です。それぞれの解釈に言い分があります。

私は父母の病としています。それは、何度もお話ししているように、最高の愛情は父母への愛情です。最大の悲しみは親の死です。その立場からすると、子どもは十分気を付けるべきだと、そう思っています。

しかし、この二つの解釈があることをお知らせしておきます。

しいわ ふぼ とし し  
「子曰く、父母の年、知らざる可からず。

ある すなわ もっと よろこ ある すなわ もっと おそ  
一いは則ち以て喜び、一いは則ち以て懼る」(里仁第四)

先ほど、父母の病気について心配すべきだと申しました。ここも関わってきます。自分の父母の年齢をしっかりと知っていかなくてはいけない。それを「可からず」と強く言っています。

次は古代の文章の特徴ですが、「一いは・・・」「一いは・・・」。この場合はこう、この場合はこう、と言う時に使う構文です。

「一いは則ち以て喜び、一いは則ち以て懼る」

親が元気であるときは、長生きしてくれてうれしいと喜ぶ。病気であるときや、ことばや動作から老いたと感じたときは、大丈夫かなと心配する。そのようにしなさい。こういうことが大事だと言っています。

元気であれば、長命だと喜び、具合が悪くなれば、親にして上げられることを考える。

両親と子の素朴な関係を、今の日本人は次第に忘れていっているのではないかと、私はそんな気もしています。古い時代のことばですが、このような素朴なことばに、人の愛情が含まれていると思います。

次は『論語』の中でも、最も有名なことばの一つです。

「季路<sup>きろ</sup>鬼神<sup>きしん</sup>に事<sup>つか</sup>うるを問<sup>と</sup>う。

子曰<sup>しいわ</sup>く、未<sup>いま</sup>だ人<sup>ひと</sup>に事<sup>つか</sup>うる能<sup>あた</sup>わずんば、焉<sup>いづく</sup>んぞ能<sup>よ</sup>く鬼<sup>き</sup>に事<sup>つか</sup>えん、と。

曰<sup>いわ</sup>く、敢<sup>あ</sup>えて死<sup>し</sup>を問<sup>と</sup>う、と。曰<sup>いわ</sup>く、未<sup>いま</sup>だ生<sup>せい</sup>を知らずんば、焉<sup>いづく</sup>んぞ死<sup>し</sup>を知らんや、と」

(先進第十一)

これは重要な内容です。

季路<sup>しろ</sup>は子路のことです。

「鬼神」の「鬼」は靈魂。亡くなった方の魂です。「鬼」は祖先を祀って、死の世界から呼び寄せますから、やはり、怖いものというイメージがあります。その怖いイメージが、もっと土俗化して、やがて「鬼 おに」となりました。我が国では「鬼 おに」は、悪いもの、恐ろ

しいものと思われています。しかし、それは本来とはまったく違うものです。

「神」とは、何か不可思議なものを表現したことばです。「かみ」ではなく、「しん」と読みます。

神（かみ）もまた「神 しん」と言っていていいでしょう、この世には不思議なことが多くありますね。それが「神」です。

「鬼」は亡くなった人間の魂、「神」はこの世の不思議なこと。「鬼神」は我々にとって非常に不思議なものです。

子路が、鬼神にお仕えする、お祀りするにはどのようにすればいいのですか、と聞きました。

その意味合いは何かと孔子に教えを乞いました。

ここで、ちょっと話を変えます。重要なことを申します。最後の一文についてです。

従来は「曰く、未だ生を知らず。焉んぞ死を知らんや」こう読む人が圧倒的に多い。

その解釈は、自分はまだ、生きていることの意味がわからない。だからどうして、死の意味など分かり得ようか。

昔からこのような解釈をする人が多いのです。

しかし、私は、その見方はいけないと思っています。

なぜなら、儒教は死について非常に多く語っています。お墓や祖先を祀るというのは、全て死に関わっています。

そこで私は、「未だ生を知らずんば、焉んぞ死を知らんや」と読みます。

解釈は、まだ生きて在ることの意味を知らないとすれば、どうして死について深く知ることができようか。生きて在ることをしっかりとせよ。

つまり、「知らないのであれば」という条件の意味であると考えました。

鬼神について知ろうと思えば、この生きてあることの意味を、十分知り尽くさなければだめだ、と。しっかりと現実を生きていけと解釈しました。

それが、死後の世界との関わりという意味で生きてくると思います。

その前の文もそうです。

「子曰く、未だ人に事うる能わずんば、焉んぞ能く鬼に事えん」

これも同じく、こう読む人が多い。

「子曰く、未だ人に事うる能わず。焉んぞ能く鬼に事えん」

このときの解釈は、生きている人に仕えることができない。どうして亡くなった人に仕えることができよう。

私は、そうではなくて、生きている人、これはおそらく父母をイメージしていると思います。

その人にきちんと仕えることができなければ、どうしてお亡くなりになった先祖の方々に仕えること、慰霊をすることができようか。と解釈しております。

私の読み方に従いますと、「鬼神」をしっかり理解しようと思うと、生きていらっしゃる父母にいつも気持ちを捧げなくてはだめだ、そういうことと思います。自信を持って、そういう読み方をしています。これが「愛と死と孝と」の柱の中心となる在り方と思います。

このことばの「人」は、生きている父母であると理解をすれば、意味が通ります。

「鬼」は亡き先祖の方々。「生」は父母が生きていらっしゃること。

父母の生きていらっしゃることの意味を知らなければ、どうして父母の死について考えることができようか、というところにまで、踏み込んでよろしいかと思います。

これが『論語』の中でも非常に重要なことばです。

これまで、『論語』並びに孔子のことばを通じて、人生における様々な知恵であるとか、あるいは宗教的な意味であるとか、全般についてお話ししてきました。

皆さんには、それらの意味合いを含んで『論語』を読んでもらいたいと思います。

『論語』は、宗教としての『論語』、道徳としての『論語』を学ぶことも大事ですが、もうひと

つあると思います。それは、孔子という人物の、その姿をよく表している文章に接することができるということです。

『論語』の持っている非常に人間的な側面を表している文章がありますので、それを最後に紹介します。

これは本日のテーマとは離れますけれども、『論語』全体を括るようなことばですので、あえて最後におきました。

「<sup>はくぎゅう</sup>伯<sup>やまいあ</sup>牛<sup>し</sup>疾<sup>これ</sup>有<sup>と</sup>り。子<sup>まどよ</sup>之<sup>て</sup>を<sup>と</sup>問<sup>いわ</sup>う。牖<sup>これ</sup>自<sup>な</sup>りその手<sup>な</sup>を執<sup>な</sup>りて曰<sup>な</sup>く、之<sup>な</sup>ぞ亡<sup>な</sup>からん。

<sup>めい</sup>命<sup>こ</sup>なるかな。斯<sup>ひと</sup>の人<sup>こ</sup>にして、斯<sup>やまいあ</sup>の疾<sup>こ</sup>有<sup>ひと</sup>り。斯<sup>こ</sup>の人<sup>やまいあ</sup>にして、斯<sup>やまいあ</sup>の疾<sup>こ</sup>有<sup>やまいあ</sup>り、と」(雍也第六)

伯<sup>ぜんこう</sup>牛<sup>ひと</sup>は冉<sup>ぜんはくぎゅう</sup>耕<sup>ひと</sup>という人<sup>ひと</sup>です。冉<sup>ぜんはくぎゅう</sup>伯<sup>ひと</sup>牛<sup>ひと</sup>です。この人が病<sup>ぜんはくぎゅう</sup>気<sup>ひと</sup>になりました。

古代で「疾」とあえて書けば、重い病です。軽い病気など書きません。古来、注釈家達はこの病は何であるかを議論してきましたが、ハンセン病であろうと、推定されています。

なぜなら、この伯牛は弟子として入門していながら、ある時から急に人と会わなくなりました。

引きこもってしまいました。友人が行っても、誰が行っても会おうとしない。ハンセン病の進行が速かったのでしょう。

ご承知のように、今日ではハンセン病は治ります。かつての医学では治すことができませんでした。そのために、ハンセン病の方々は隔離されました。そして人々の差別の目の中で静かに暮らしていく以外なかったのですね。この病気は皮膚が崩れていきます。顔も手も足の皮膚も崩れていきます。

伯牛が誰にも会わなかったというのは、このハンセン病の進行が深刻であったということでしょう。

そこで、孔子が伯牛の家を訪れるのです。

しかし伯牛は会わなかった。すると孔子は窓から手を差し入れた。

孔子の手を、伯牛は押し頂き、孔子は伯牛の手をしっかりと握ったのです。

「牖自りその手を執りて曰く」

これは並みの人間にできることではありません。当時恐れられていた病気の手を握ることは普通はできません。そして孔子は言いました。

「之ぞ亡からん。命なるかな」

こんなことがあっていいのか、運命だ、と。優秀なお前が、このような病に倒れるとは。

そして、最後に、この有名な繰り返しがあるわけです。

「斯の人にして、斯の疾有り。斯の人にして、斯の疾有り」

二回繰り返しています。孔子は実際に繰り返して言ったのでしょうか。この立派な男に、この不治の病があるのか、これが運命なのか、と嘆きのことばです。

「斯の人にして、斯の疾有り。斯の人にして、斯の疾有り」

孔子の嘆きの気持ちがよく表れていることばと思います。

孔子は、窓から手を出して、顔を合わせる事のない弟子の手をしっかりと握る。おそらく伯牛は両手で孔子の手を包んでいたでしょう。

これは『論語』の中でも、最も劇的なシーンです。

私は『論語』を読むたびに、このシーンが、『論語』を本当の意味での「人間の書」であり、「古典」であることを示しているのだと思います。

皆さんも『論語』を読んでください。いろいろな物語があります。

孔子と伯牛との出会いの、この文は、ぜひとも何度もお読みいただきたいと思います。

今回は「愛と死と孝と」の第二回であり、講座の最後の回です。

今後もどうか、『論語』をしっかりと読んでいただきますようお願いいたします。